

# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「被りもの王国新潟」

あなたは今、頭になにか被っていますか？なに、手ぬぐい？掃除に野良仕事お疲れさま。紅白帽は、頑張れ運動会。ヘルメットなら、安全第一。兜だったら、いざ、合戦。と言うように被りものはその人に関する様々な情報を知らせてくれます。

なぜ、またここにきて被りものかね？というあなた、実は新潟は「被りもの王国」なのでありますよ。ホントかね？という人、本当です。筆者がかねてより、独自に秘かに、きままに、民俗学・素人学的に調査してきた結果、『新潟は被りものが多い！しかも「笠系」「布系」の宝庫である』ということが判明しております（民俗学・新潟学的見地のため、今回は合戦系、変装系、毛髪系のたぐいは除きますのでご安心ください）。

まず、笠系からみていきます。全国的には、竹やヒノキ製の経木を使った笠が多いのですが、県内ではそのほとんどがスゲで編んだいわゆる「スゲ笠」です。またこの形も県内は様々で、二等辺三角形の「平笠」を中心になんと80種以上、そのうち40種が佐渡にみられるというから驚きです。笠ひとつに一県でこれだけの種があるのもおそらく新潟だけと思われれます。下越地方の平野部では二等辺三角形の勾配を緩やかにした「平富士笠」、さらにもっと緩やかにした「一文字笠」も見られます。さらに、三角形をとんがらせた「とんがり笠」や「ななもり笠」も旧西蒲原に存在します。

布系ならば、県北の地に見られる女性の被りもの、和製ブルカかチャドルといった「目だし被り布」。隣県の山形、秋田でもみられる「ハンコタンナ」「ハンコタナ」は二枚の布で頭と顔を包みます

が、県内では一枚の布で眼だけ出すのが特徴です。城下町ではその昔、お殿様に目をつけられぬよう女性が顔隠しに使ったという最もらしい説もありますが、いとしげか麗しいか否かはほとんど目元で判明できるので、「いとしげ隠し説」は怪しいように思えます。県内の呼び名は「ドモコ」「ドーモコモ」「ブス」「ボス」と、およそいとしげとはかけ離れた響きです。「コレ被ると、ドーモコモならぬ」やら「ドンげ顔にもドーモ、コモモ合わせられる」ということで呼ばれるようになったという説もあります。

いずれにしても笠にしろ、布にしろ新潟の被りものは、冬夏の厳しい気候と人々の奥ゆかしさとがあいまって、被る・隠す・覆うを生みだしてきたようにも思えてきます。

それはそうと、この春県内の博物館で「かぶりものと女のモノ語り—なぜ女は顔を隠すのか？—」が開催されました。残念なことに見逃してしまったのですが、被りもの人は入場料割引とありました。ヘルメット、タオル、カチューシャ、トキの着ぐるみetc、本当に被りものなら何でもOKだったのか？カツラは自己申告か？ブス・ボス被りはいたのか？その場で作った折り紙の兜は可能だったのか？等々、こちらの方がとっても気になる猫かぶりのわたくしです。

